

山形県におけるサトイモの機械化早期栽培法

第1報 移植時期及び移植法

鈴木 勝治・小野 恵二*・岡崎 幸吉

(山形県立農業試験場・*寒河江農業改良普及所)

Early Harvesting Techniquis for Using Transplanter of Taro (*Colocasia esculenta*) in Yamagata

1. Date of transplant and techniquis of transplant

Katsuji SUZUKI, Keiji ONO* and Koukichi OKAZAKI

(Yamagata Prefectural Agricultural Experiment Station *)
*Sagae Agricultural Extension Service Station

1 はじめに

山形県の風物詩である芋煮会は、10月に行なわれていたが、近年は開催時期が早まり9月上旬から行なわれるようになってきた。しかし、9月の芋煮会には地場のサトイモの供給は少なく、他県から仕入れている現状にある。本試験では、この対策として、サトイモの機械化早期栽培に適する育苗法、栽培法並びに機械移植について検討した。

2 試験方法

試験A — 育苗日数及び定植時期

育苗日数：19日育苗及び28日育苗

定植時期：4月26日、5月7日、5月27日

移植法：機械移植

栽培法：高うねマルチ栽培

※機械移植は、前以て作っておいた高うねマルチにタバコ移植機を利用して行った。

試験B — 移植・栽培法

移植法：手植え、機械移植

栽培法：土寄せ栽培（慣行栽培）

高うねマルチ栽培

※慣行栽培は、鍬で溝を掘り手植え

機械移植は、前以て作っておいた高うねマルチにタバ

コ移植機を利用して行った。

定植5月7日

栽培概要

催芽法

サトイモを2分割し、さらし粉の300倍液で15分消毒後、さらにベンレートT20倍液で1分消毒してタバコ育苗ポットに並べ、培土を芋のまわりに詰める。30°Cにセットした水稲用催芽器に入庫し、10日間催芽させる。その後順化する。

栽培様式

うね幅130cm、株間35cm

高うねマルチ栽培は

ベット幅60cm、ベット高25cm

植え付け深度15cm

施肥量(10a当り) N:10.0 P₂O₅:10.0 K₂O:10.0

慣行栽培 N:16.4 P₂O₅:14.0 K₂O:15.6

3 試験結果

(1) 定植時期

9月2日の収穫では、定植が4月下旬、5月上旬区ともに肥大が良く、規格別ではM、S級が主体であった(図1)。株当たりの芋数は、3次芋まで含めると、約30個であり、商品収量は10a当たりで2t以上であった。(図3)

10月1日の収穫では、芋の肥大も進み5月下旬の定植区

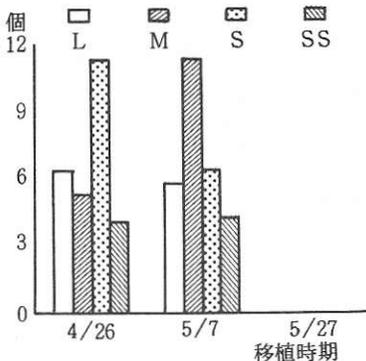


図1 早期収穫におけるサトイモの階級別収量

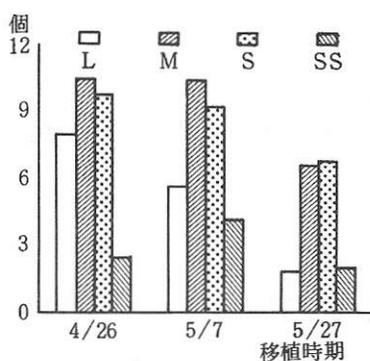


図2 普通収穫におけるサトイモの階級別収量

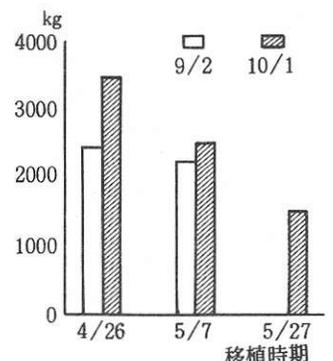


図3 サトイモの定植時期別商品収量

でも収穫が可能であった。規格別芋数は、L、M級が多くなり(図2)、株当たりの収量は、5月上旬までの定植で33個、5月下旬の定植では18個であった。商品収量は、4月下旬定植区が3.4t、5月上旬が2.5t、5月下旬は1.5tであった。(図3)

(2) 移植・栽培法

収穫芋数は、マルチ両区(手植え、機械移植)は2次芋の着生が多く、1次芋の約2倍であったが、慣行栽培では、

1次芋の着生に比較し、2次芋は少なく約1.5倍であった。(図4)

また、2次芋は、マルチ両区で大きく、慣行栽培区に比較し約8g重かった。(図5)

時期別商品収量は、マルチ両区で9月上、中旬とも2t以上であったが、慣行栽培区は、9月中旬でも1.8tであった。(図6)

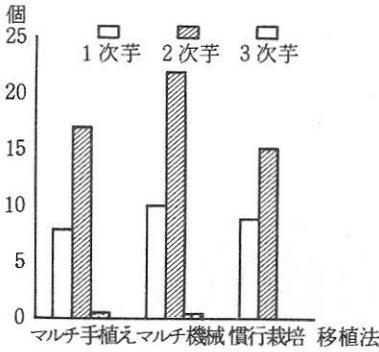


図4 移植法別サイイモの着生

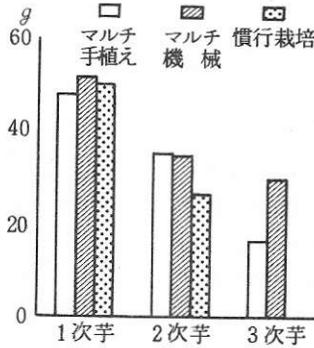


図5 着生芋の種類別重量

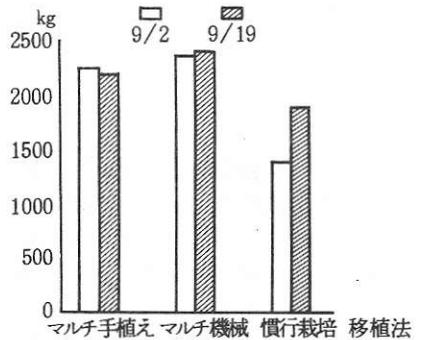


図6 移植法別商品収量

4 ま と め

(1) 定植時期：4月下旬から5月上旬までに定植を行うと9月上旬に収穫でき、約2tの商品収量が得られる。

(2) 移植・栽培法：栽培全期間マルチ栽培を行えば生育が進み、収穫時期が早まる。機械移植を行えば、省力的であり、生育収量には問題はない。